

中日米における魯迅と基督教の研究について

陳 維

Abstract: By analyzing the works of eight researchers who come from China, Japan, America, this paper is going to explain the literature review of Lu Xun and the Christian culture, the current research status and research tendency, thus to clarify the existing problems, and explore the possibility of probing into the new research field.

Keywords: Lu Xun Christian culture Self-sacrifice Revenge Redemption

はじめに

魯迅と基督教文化という研究課題は、中国の改革開放以降ようやく研究の緒に就いた非常に重要な学術的な課題の一つである。日本人の学者竹内好は、1944年に既に彼の著作『魯迅』の中で、魯迅の文学には伝統的な中国文化とは異なった文化の因子があることを指摘している。この文化の因子は西洋から、つまりヨーロッパ文明の基礎としての基督教から受け入れられたものであろうと彼は考えていた。彼は魯迅の処女作『狂人日記』の後半部分から、魯迅の文学を「贖罪の意識」としてとらえ、魯迅の文学を「贖罪の文学」と定義した。しかし、竹内好は引き続き魯迅の文学を掘り下げることをしなかった。一体、『狂人日記』のほか、「贖罪の文学」はどこに現れているのか？一体、それと西洋の基督教文化とはどのような関係にあるのか？これらの問題はすべて解決されていないとも言えよう。日本において魯迅を研究していたもう一人の専門家伊藤虎丸は、竹内好と同様な視点で魯迅の文学を基督教の「終末論」に帰結させた。魯迅の自己犠牲の精神は、できるだけ早く古い世界を壊滅したうえで新世界の到来を期待する「終末論」と似ている信仰だろうと、彼は考えていた。

日本人学者の研究に比べると、中国におけるこの方面の研究はスタートが遅かった。1995年に至って、ようやく基督教文化と中国の近代作家との関係に着目した著作が出版された。魯迅を議論したのはその本の一章である。続く数年間で、続々と何冊かの著作が誕生したが、全体の論題は依然として変化せず、基督教文化と中国の近代作家との関係を解明しようとするものであり、魯迅がその一章をなしているものにすぎなかった。それらの特徴はすべて実証主義の精神に導かれて、魯迅が基督教の文化について一体どんな言論を發したのかを明

らかにし、魯迅がキリスト教文化を受け入れた契機を解明しようとした。アメリカの研究者としては、ルイス・ロビンソン (Lewis Stewart ROBINSON) が魯迅の『野草』について中国人の研究者とは異なって、非常に優れた見方を持っているとわかった。

本論文は、中国、日本、アメリカの8人の研究者の研究論著を分析することを通して、「魯迅とキリスト教文化」に関する研究の歴史、また現在の研究の状況および傾向を分析して、その問題を整理し、探求し、まだ十分に論議されていない領域に触れてみようとする試みである。

一 中国からの著作

(1) 『十字架下の徘徊—基督宗教文化と中国現代文学』¹

上掲の著作は、筆者の知る限り、中国の改革開放以後、キリスト教文化と中国現代文学との関係を最初に論述した系統的な著作である。中国の建国以後、我が国の政治と文化に関する様々な歴史的要因のため、系統的に西洋のキリスト教と我が国の現代文学との関係を研究することができず、いわば、長い間等閑視されてきた空白の研究領域であった。80年代以降、続々といくつかの論文が発表されたが、系統的な研究は非常に少なく、本著はこの領域の中で探求した最初の試みであった。

本著は6章に分けられている。その第1章「鋭い両刃——キリストとキリストの精神を呼びかけよう」の第1節「魯迅——孤独で、災難にあっても冷静に抵抗しようとしているキリスト像」は、直接に魯迅とキリスト教文化との関係を思索したものである。紙幅はそれほど長くないが、字数は1万余りであるが、魯迅とキリスト教文化との関係を全面的に把握している。作者はまずこう言う。20世紀初期、中国はルネッサンス直前の状況で、ダンテ或いは新文化運動前の蘇曼殊の時代と似ていたとも言える。ハイデッガーが言ったように、古い神が次から次へと立ち去って、新しい神がまだ顔を出していないという時代であった。すなわち、これは二重苦難の境遇に陥っていて、何かを求めている時代であった。つまり神は立ち去って、二度と来ないのに、来るべき神がまだ出現していない。後の新文化運動は、この静まり返っている状況を打ち破った。中国は1人のキリスト式の巨人を求めていて、その後、偉大な巨人が現れていたという偉大な変革と目覚めの時代であった。最初に鮮明なイメージを体現したのは魯迅である。

作者はまずこの「求めている時代」に、魯迅が最初にキリスト式の犠牲者と救う者として登場したのであったと考えている。彼は魯迅の話で例証した。「目覚めた人が……、めいめい自分のこどもを解放するより仕方がないのである。自分が因習の重荷をにない、真っ暗な水門の内側から扉を肩で押しあけて、かれらを広い、光のある場所に出してやる——これからは幸福に生

¹ 馬佳『十字架下の徘徊—基督宗教文化と中国現代文学』、學林出版社、1995年。

活し、人間らしい人間になれるように。」²引き続き作者はこう言う。この因習の重荷は人類の原罪のようであり、この真っ暗な水門をキリストの背負っている十字架に例え、魯迅が 20 世紀に中国文化の舞台で民族の支柱となり、国民のキリストとして現れてきた。

第二、作者はキリストの受難と魯迅の小説『薬』との関係に着目した。夏瑜とイエスの受難とを比べてみると、テーマは非常に類似している。両方とも自分の犠牲で救われる者の良知と目覚めを喚起しようとするが、愚かで無知な者にバカにされた。夏瑜が殺害され、彼の鮮血も饅頭と混ぜられ、小栓の病気を治そうとする薬になった。一方、イエスは非情にも十字架につけられた。

第三、作者はイエスが 1 人の詩人であると強調した。明晰な思想、また意味深い哲理、高尚で純粋な人格で世間の人々を感動させた。魯迅は偉大な詩人のような宗教家である。彼の詩はすべて戦う檄文、また動員するラップ、黎明の呼びかけであり、強烈な宗教の激情に溢れている。

第四、作者は魯迅の初期の著作『魔羅詩力説』を中心に大幅に論述している。この激情溢れる文章では、最初から主旨を明らかにして、ヘブライ文明を褒め称えている。特に第四章で、熱意をもって『旧約聖書』から取材し、キリスト教と関係があるバイロンの詩劇と叙事詩三種、つまり『マンフレッド』、『カイン』、『天と地』を推薦した。

第五、作者は『狂人日記』著作中の狂人と、散文詩『復讐(二)』における十字架につけられたキリストとの間に、密接な繋がりがあり、魯迅自身の影と魂がはっきり見られると主張している。

最後に、作者はこう総括した。「五四」の時期に、魯迅は抵抗し、受難し、孤独なイエスを演じていて、当時の激しい流れの中で勇敢に立ち向かって、十字架を担っているキリストとなった。

(2) 『曠野的呼聲—中国現代作家與基督教文化』³

馬佳の著作に続いて、中国の近代作家とキリスト教との関係を研究する著作が発表された。それは楊劍龍の『荒野の叫び声—中国の近代作家とキリスト教の文化』であった。

この著作の着眼点は、中国の作家がどのようにキリスト教に反対しているかというわけではなくて、彼らがどれくらいキリスト教の精神を認めていたかということである。更にもっと重要なことは、彼らがどのように自分自身の血肉をなす伝統文化の因子から、キリスト精神の存在を発見してきたかということである。たとえば中国の作家たちに尊重されている犠牲を以つ

² 魯迅『墳・子の父としていま何をするか』、竹内好訳、筑摩書房、1977年。以下原文：覺醒的人……，各自解放了自己的孩子，自己背著因襲的重擔，肩住了黑暗的閘門，放他們到寬闊光明的地方去；以後幸福的度日，合理的做人。（『魯迅全集・墳』、人民文学出版社、2005年。）

³ 楊劍龍『曠野的呼聲—中國現代作家與基督教文化』、上海教育出版社、1998年。

て世間の人を救おうとする道徳的な品性と、イエスの「崇高で偉大な人格と熱烈な感情」とを直接に関連づけたことである。このような人格を追求する現象は、中国の作家たちがキリスト教から積極的に影響を受けたということに帰するわけである。

本著の第2章——魯迅——「自分が因習の重荷をにない、真っ暗な水門の内側から扉を肩で押しあけている」は、作者が主に魯迅とキリスト教文化との関係を論述した一章である。作者の意見は以下の通りである。

まず、初期の魯迅は、キリスト教の文化を評価する時、客観的で弁証法的な態度を取っている。魯迅が発表した『文化偏至論』で、ヘブライ文化の輝いた荘厳と深遠な影響を肯定しているが、中世紀にキリスト教が科学精神と思想の自由を抑制したことを強く批判した。中世の暗黒の宗教が科学を抑えたことを暴き出す同時に、宗教が社会の精神の花を懐胎したことに称賛を与えた。

第二、魯迅はキリスト教の文化、またキリスト教の教義を考察する時、キリスト教の「創世説」と「天国説」と「奇跡説」などという教義に否定的な意見を持っている。

第三、魯迅はキリストの救世の精神を、肯定し、高く評価した。

第四、魯迅は、『聖書』で、キリストが死ぬという一幕を非常に偏愛し、『復讐(二)』を創作したことがある。それは『聖書』の原型を借りて、再創作し、イエスが受難した時の心理状態と復讐の気持ちを強調した。民衆のため献身したが、理解して貰えなかった孤独な英雄のイメージを作り出した。これは『聖書』でのキリストの原型とは明らかに本質が違うことがわかった。

第五、「五四」時期の魯迅は進化論を思想の武器として、「立人」の思想から出発し、子供への特殊な関心と愛と期待を表した。このような「幼い者を本位にしよう」とする思想はキリスト教文化の影響をかなり受けていると言えよう。

最後に、作者はこう総括した。魯迅は寛容で慎重な態度で、キリスト教の歴史と思想を入念に分析し、役立つ部分を一生懸命に取り入れて、暗黒の社会で闘争する精神力の一部分にしたことだろう。だからこそ、魯迅は世間の人々を救うために受難したキリストとなった。

(3) 『20世紀中国文学與基督教文化』⁴

本著は21世紀に入ってから、先人の著作に基いて、中国の作家たちとキリスト教との関係について、系統的に、全面的な整理をした著作である。

作者は、前書きの「20世紀、中国文学とキリスト教との関係を研究する意義」で、20世紀の中国文学とキリスト教との関係は、含むべき二つの命題がある。一は、20世紀に、中国ではキリスト教の現れのため、精神の意味と言語の形式が新しく変化してきた。二は、20世紀の中国

⁴ 王本朝『20世紀中國文學與基督教』、安徽教育出版社、2002年。

文学とキリスト教との交流の中で、中国の知識人と文学がどんな身分の特徴をもっているかと表している。それらも中国現代文学の伝統と現代の思想と文化の間で、どのように構成したかという問題に関わる。20世紀以後、中国文学は日に日に貧困な危機が現れてきて、文学の創作と解析は、活気に溢れている意味と形式を出していない。こんな時に、キリスト教文化が中国文学の変革を奮い立たせて、その自身も白話文学の資源となった。

本著の第3章——魯迅とキリスト教文化で、作者は魯迅とキリスト教との関係を総括する時、以下のように言う。魯迅が関心を持っている世界は、中国社会と人の現実と精神の問題を巡らされている。だが、その視点は、伝統の歴史と西洋の思想であり、キリスト教も魯迅に価値の反省と、また思想と感情の体験を与えてくれた。魯迅は人類社会の宗教が非現実的な力があることを疑っていて、批判しているキリスト教文化を超越し、社会の人文の価値をしっかりと守っている。魯迅の精神の理想と価値の目標は非宗教であるが、彼の行為と心理の体験は宗教的な面があるだろう。

まず、作者は、魯迅の日本留学の時期を、一生の中でわりにキリスト教の文化に集中していた時期だと考えている。魯迅は宗教と科学、宗教と道徳、宗教と芸術の角度からキリスト教を考察し、それらの間の矛盾関係を念入りに解明した。

第二、作者は、魯迅が西洋思想の発展を探求するのは、やはり中国の問題に答えるためだと強調した。『破悪声論』と『魔羅詩力説』は、ヘブライ民族と中国の信条との相違を比較して、ヘブライ民族の宗教精神と『聖書』の価値を肯定した。

第三、作者は、魯迅がヘブライ民族の精神の「信条」、また『旧約聖書』でのサタンを重んずるのは、魯迅の若い時期における啓蒙思想の特徴をはっきりと示している。

第四、作者は、魯迅がよく自分の感情の体験を表すため、キリスト教を借りて、叙情的に話していると考えている。例えば、懺悔、贖罪の心理と犠牲の精神である。それに、魯迅の懺悔の意識が、主に歴史と文化と個人の反省から来た「文化の原罪」であって、キリスト教の原罪とは異なっている。

第五、作者は、魯迅が心理の感情に強烈な共鳴を起こしたことがキリスト教でのイエスの受難だと考えている。魯迅はイエスが復活した真実性の問題に感心せず、イエスの運命で現れたひどい悲劇性を掘り下げている。それにイエスの受難は、現実の生活で、先覚者と大衆、また母と息子の対立という受難者の復讐の心理に転化させた。特に『崩れた線の震え』と小説『葉』との構成の設置上で、イエスの受難をある程度まで参考にした。

第六、作者は、魯迅がイエスの受難に対して最も感じたのが、彼の寛容と同情ではなく「目には目を、歯には歯を」の復讐であると考えている。魯迅の思想は更に『旧約聖書』と近く、鮮明なナショナリズムの立場があり、イエスの寛容と同情とは違う。

第七、作者は、魯迅のあらゆる贖罪と懺悔の心理と犠牲の精神は、すべて、人の現実配慮する立場に立っていると考えている。それらは宗教と似ている形式と構造があるが、終極性と

精神の完璧さから、魯迅は人と物事の終極性と完璧さを疑う態度を持っていると言えよう。

最後に、作者は全文を総括し、次のように言う。魯迅とキリスト教との関係を探求してみるのには、魯迅がキリスト教への信奉があったかどうかと解明するわけではなく、それらとの関係から、彼の思想の複雑な個性を見出すためである。魯迅がどのようにキリスト教を評価しているかということは、魯迅がどのように人の物質性、精神性、時間性、空間性を理解しているかということに関わるだろう。

(4) 『中国現代文学與基督教』⁵

馬佳と楊劍龍の著作と似ているのは、許正林の著作『中国の現代文学とキリスト教』である。本著もまだ、20世紀初頭における中国の近代作家とキリスト教文化との関係を探求する本である。その本の第一章「キリスト教——近代作家が文化を探索する時の役割」の第一節「魯迅——広々とした広野で、たった一人の呼びかけ」で論述した。作者は、魯迅がキリスト教文化を受け入れたことを概況して、こう言った。イエスが他者のために献身した崇高な人格を敬慕する一方、大衆に理解されていない献身者の孤独に心を痛めていて、中国において普段よく宗教のことを口から出そうとする心理的なプレッシャーを感じた。

具体的に言えば、魯迅を論述した一章は、以下の3つの部分に分けることができる。

第一、魯迅の宗教についての文化観である。まず、作者は、魯迅が一生黙々として様々な方面においてキリスト教に関心を持っている。これは魯迅が所蔵した『聖書』と版画などからわかると考えている。二、作者は、魯迅が宗教を崇敬し、偽りの宗教の信仰者に反感を持っていると考えている。三、作者は、魯迅がキリスト教を一種の文化として認めており、当時の中国では必要かもしれないが、「国民の革命」にあたって、宗教を持ち出すのは、時宜に合わないと考えている。また、文芸家として、宗教を了解せねばならず、文芸家が宗教文化の教養を身につけるべきことに、肯定的な態度を取っていると考えている。四、作者は、魯迅が宗教と人類文化の歴史の過程を結びつけて、考察していると考えている。科学が抑圧されたことで宗教を批判し、一方では、宗教が思想と文化の束縛から、例えばコペルニクス、ダーウィンなどの科学の進歩を促進させたことも見逃さなかったと考えている。五、作者は、魯迅が「神」の幻影から脱出した前提の下で宗教の合理的な核心を選択していると考えている。魯迅はキリスト教が宣伝している「地獄」、「天国」と「神」の説を暴き出している一方、宗教の信仰が社会の道徳に積極的な促進の作用があると高く評価している。

第二、魯迅の宗教への文学観である。一、作家は、魯迅の『魔羅詩力説』で言及したバイロンの劇作『カイン』を例に挙げながら、魯迅がこの劇作で人類の反逆者の精神を発見し、独立と自由人の強い精神を表していると思っていると考えている。この劇を書いたバイロンとロマ

⁵ 許正林『中国現代文学與基督教』、上海大學出版社、2003年。

ンチックな詩人の反逆の人格は、正にサタン精神の沈積の解放であろう。二、作者は、魯迅がよく議論しているロシア作家のドストエフスキーを例に挙げながら、魯迅からみると、ドストエフスキーの偉大が最初に他人の魂を拷問し、人々に隠れている「善には悪があり、あるいは悪には善がある」ということ、また誰も逃れようがないこのような善悪の衝突と精神の苦悶の刑罰を暴き出した。その次に、ドストエフスキーの文章では、人が反省と矯正と懺悔を通して、不潔を除去し、魂の新生を求めようとするのが描かれた。三、彼は他人に精神の苦悶の刑罰を受けさせ、魂を審判させたと、自分でもこのような刑罰と裁判を受けていると言えよう。

第三、魯迅の作品での宗教の意識である。作者は、特に魯迅の散文詩『復讐（二）』を例に挙げながら説明した。まず、全文の基本的な素材は明らかに『聖書』の『福音書』から来たものであろうと考えている。その次に、文章の中でとても際立ったイエスが十字架につけられた時、骨を叩かれた肉体の苦痛が描写された。これは『福音書』にない内容で、魯迅が自分の医学の常識で想像し、創作したのであろう。三、魯迅は『福音書』の基本的な記述に従っているが、イエスが肉体の苦痛の受難にあった時でも、依然としてイスラエル人の前途を心配している。だが、なかなか理解してくれないという内心の悲しみと、苦痛と疑惑があっただろう。

最後に、作者は全文を総括し、こう言った。魯迅がキリスト教を考察することとキリスト教が魯迅に影響を与えたことは、すべてただ俗世間の段階に留まっている。魯迅はダンテとドストエフスキーを尊敬していても、キリスト教の信条に向かって行かなかった。魯迅が黙々と部分的にキリスト教の影響を受けたことは、ただキリスト教に含まれている人類の普遍的な「真」、「善」、「美」を認めただけである。魯迅は十字架につけられたイエスの悲しみと孤独に同感しているが、イエスのように、神を恭しく崇めているわけではなく、永遠に現世の世界に固執している。これは魯迅の独立の人格だといえよう。

(5) 『魯迅與宗教文化』⁶

本著は魯迅と各種の宗教との関係についての著作である。その内容は詳細で精確であり、魯迅と宗教文化という課題で、非常に業績が際立っている著作だと言っても過言ではない。

作者は本著の第1章で、魯迅の宗教観を概観する時、こういう意見を出している。魯迅と宗教文化との関係を探求するのは、即ち宗教の起源、本質、効果などという基本的な問題について、魯迅がどういうふうに認識しているか、またその認識がどのように発展していったかをはっきり把握すべきである。魯迅が宗教の起源を論述したことからみて、作者は三点にまとめた。一、宗教が、人類の精神を満たすため、誕生したと魯迅は強調している。二、宗教の誕生のための信仰の働きを強調した。三、宗教は人類が「無限」と「絶対」を探究することを強調した。魯迅が初期に言及した宗教の本質及び社会の効果について、作者はこう考えている。一、簡単

⁶ 鄭欣森『魯迅與宗教文化』、中國社會科學出版社、2004年。

な観点で宗教を見ることに反対した。二、宗教が社会生活で積極的な要素だと気がついた。三、中国の古代の宗教を重視し肯定した。魯迅の生命の最後の10年に、魯迅は史的唯物論をうまく運用しながら、激烈な階級闘争と民族の闘争とをしっかりと結び付けて、宗教の欺瞞性を暴き出し、帝国主義と国民党が宗教と封建的な迷信を利用して愚民政策を推進したことを非難した。

宗教が起きた効果について、作者は以下の何部分かに分けた。一、原始の芸術と宗教。二、神話と宗教。三、詩歌と宗教。四、小説と宗教。最後に、作者はこの章を総括して、魯迅の宗教観は、思想の発展の前後に重大な変化があったが、不変なこともある。それは魯迅はずっと宗教を文化現象として評価し、簡単な否定の態度で宗教を見ることに反対した。

本著の第五章「魯迅とキリストについて」は魯迅とキリスト教との関係を論述するもっとも重要な一章である。

まず、作者は、キリスト教の歴史及びヨーロッパの文化と発展との関係について、魯迅が初期の『文化偏至論』で、明晰的で全面的な分析を行ったと考えている。

第二、作者は、魯迅が一生を通じて科学を堅持し、キリスト教が宣伝している宗教の神話に反対したと考えている。

第三、作者は、キリスト教が西洋文学と芸術の発展に重要な効果を与えたと考えている。魯迅は、文学を翻訳する時、これらの作品とキリスト教との関係に十分な注意を払って、作品中の宗教観念について透徹した分析を行い、作者の世界観での宗教思想を入念に探求し、これらの作品への態度を指摘した。例えば、魔羅詩力派、ダンテ、ドストエフスキー、トルストイなどである。

第四、作者は、キリスト教から深い影響を受けたため、ヨーロッパの芸術に明らかなキリスト教の傾向があると考えている。魯迅はルネッサンス時期のヨーロッパの絵画を非常に重視して、ミケランジェロとダヴィンチは「偉大な画家」と称した。魯迅はまたキリスト教教会の建築を紹介し、特に『ゲーテ・コルヴィッツ版画選集』を編集する時、キリスト教の建築の形式、つまりゴシック式について、簡潔な紹介と概括をした。

第五、作者は、魯迅がイエスが大衆によって十字架につけられたことを何度も言及したので、『聖書』について、非常に詳しいと考えている。例えば、『福音書』に基いて、『復讐(二)』を書いた。形式上からみると、『菓』と『崩れた線の震え』もイエスの受難と似ているところもある。イエスについて、魯迅は肯定的態度を持っている。

第六、作者は、魯迅がキリスト教の中での「奇跡説」、「天国」、「地獄」、「神」などの教義について否定し、批判した。

第七、作者は、魯迅が『新約聖書』の「敵を愛すべきだ」ということではなく、『旧約聖書』の「歯には歯を、目には目を」ということを重視したと考えている。

第八、作者は、魯迅がキリスト教と中国の封建的な文化との結合を、激しく批判している一方、キリスト教の知識を利用し、現実と結びつけて、国民党の統治と、暗黒の社会に、猛烈な

非難と批判をし、もっと良い闘争の効果を得た。

最後に、作者は全章を総括して、こう言った。偉大な思想家としての魯迅は、一生を通じてキリスト教の文化について真剣な研究をし、正確な判断を下した。

二 日本からの論文と著作

(1) 『魯迅の「復讐」について——「野草」「復讐」論として、併せて魯迅のキリスト教論について』⁷ 高田淳（論文）

本論文は、「魯迅とキリスト教との関係について」というテーマで、日本で最初に正面から取り上げた論文であり、『東京女子大学論集』第18巻の第一号（1967年5月）に発表された。『野草』の『復讐（二）』は最も主要な論述の対象であり、魯迅のキリスト教観を論述する中心部分をなしている。その主旨を以下の要点にまとめて述べてみたい。

まず、『復讐（二）』が、現代中国語訳『新約全書』の『馬可福音』第二十七章ではなく、第十五章にみえるイエスの受難物語を、ストーリーはいうまでもなく、その主要な用字まで踏襲していると高田氏は考えている。しかし、魯迅は決定的な点で『聖書』より離れていること、魯迅の描いたイエス像と『福音書』のそれとを較べると、根本的な点で両者には重大な差異がみられ、魯迅は『福音書』のキリスト像を根底から顛覆させようとしていると高田氏は指摘している。その差異は、『マルコによる福音書』はイエスをあくまで「神の子」として死んだと伝えるのに対して、魯迅はそれを「人の子」として描いたという点である。百人隊長が言った「本当にこの一は神の子だった」の後、魯迅は百人隊長の話在意図的に切り捨てて、更には、『四福音書』すべてにある「神の子」イエスの復活を語る部分を全て切り捨てたということがわかった。

第二、高田氏は、魯迅は受難物語の「枠」を借りて、彼の固有の「復讐」の観念を形象化したものであると考えている。

第三、日本留学期以来の、民衆によって迫害される先覚者というパターンが見られると彼は考えている。

最後に、このイエス像は、『魔羅詩力説』の神と悪魔の価値を逆転させたサタン（悪魔）像に繋がり、中国の名教的世界への批判を現実的根拠とするキリスト教批判と関連することなどであると考えている。

(2) 『魯迅思想の独異性とキリスト——近代文化の受容をめぐる』⁸ 伊藤虎丸（論文）

⁷ 高田淳「魯迅の「復讐」について——「野草」「復讐」論として、併せて魯迅のキリスト教論について」、『東京女子大学論集』第18巻第一号、1967年5月。

⁸ 伊藤虎丸「魯迅思想の独異性とキリスト——近代文化の受容をめぐる」、『東京女子大学比較文化

伊藤虎丸は、1988年3月に、『東京女子大学比較文化研究所紀要』の第49巻で、『魯迅思想の獨異性とキリスト——近代文化の受容をめぐって』をテーマとした重要な論文を発表した。この論文は、竹内好が魯迅の文学を「贖罪の文学」と定義した延長線上を更に推し進めた論文で、魯迅の文学と西洋キリスト教との関係を全面的に整理したものである。

まず、伊藤氏は、なぜ「魯迅とキリスト教」という研究課題を提出したのかを説明する。彼がここで「古い問題」と呼んだものには、(一) 魯迅における「近代」とは何か、(二) 魯迅の獨異性はどこにあるか、という二つの問題を含んでいる。彼はこの二つの問題に答える時、次のように言った。一、いわゆる「唯物論」を含む「ヨーロッパ近代」の諸思想を産んだ根底にあって、その「座標軸」(丸山真男『日本の思想』)をなしてきたものはキリスト教であり、特に魯迅が強い影響を受けたニーチェやマルクス等はその直系の子孫と考えられることである。二、同じく「魯迅の獨異性」ということでいえば、彼の文学についてしばしば指摘されてきた、「中庸」の徳などとは対極的な、激越なまでの過激さや徹底的した否定性の中に、かねて漠然とした感じとして、ある種の非中国的なもの、ひどく西洋風なもの、それもギリシヤ的というよりユダヤ的のもの、多神教的でなく一神教的なものを感じてきたということがある。

第二、伊藤氏は、本論文の枠を「魯迅のヨーロッパの近代文化の受容」という前提として、設定したから、ここでいうキリスト教は教義的なキリスト教ではなく、「文化のキリスト教」である。近代の文化について、伊藤氏はこう言った。(一)、近代の科学、文学、芸術、宗教、論理等をバラバラのものとしてではなく、一つの全体性をもつものとして総合的にみること、(二)、近代の諸思想等を既成品としてではなく、それらを産んだ根源にある人間の精神の働きから、とらえようとする、(三)、近代の普遍性を認めつつも、それをヨーロッパという一つの特殊性、個性を持った文化の産物として見る、というほどの意味である。また、これは「アジアの近代」を、西洋の衝撃(Western Impact)の結果、アジアに「新しい」文化が生み出される「自己変革」の過程としてとらえる立場に立つことを意味している。

第三、伊藤氏は、魯迅があくまで自己変革の立場に立っていると考えている。魯迅は、「主義」の次元に止まらぬ、「文化(=人間)」の次元に及ぶ「革命」の立場に立ち続けていた。つまり、魯迅が西洋に求めたものは、あくまで、民族の危急を救うべき西洋近代の科学であり文学であって、キリスト教そのものではなかった。魯迅が宗教としてのキリスト教そのものに関心を持ったという根拠はどこにも見出せないということであろう。彼が求めたものが、単なる既成品の「科学」や「主義」ではなく、それらを産み出した「根底」にある「人」の「精神」だったから、彼の目は必然的に西洋古代にまで及んで、近代文化の「神髓」をとらえようとし、その結果、近代を産んだ根底にあるキリスト教「的」な伝統にまで深く及んで、これをとらえたということにすぎない。

第四、伊藤氏は、「精神」の「根底」がある「人」の一種は魯迅の『魔羅詩力説』で論述した「サタン」と似ている人物であり、例えばバイロンなどであろうと考えている。彼らの性格は、(1) 主観内面性、(2) 傲慢なまでの強い意志、(3) 既成への反抗、(4) 無限の発展・向上をその特性とするものだった。もう一種は、イエスのような「預言者」である。彼らの特性とえば、(一) 直接に神の「召命」を受け、その「言」に預かった単独者であり（真の個人）、(二) この「啓示」としての「神の言」のみの力に拠って、王に代表される既成の世俗権力の全体に対抗する徹底した現実批判者であり、そのような政治的機能を使命として与えられている職能者である（世俗権力と対立するもの）。(三) 彼はこの「啓示」としての「神の言」の力によって、民衆の主体性・能動性を呼び醒ます者であるが（啓示としての言葉を持つもの）、同時にその故に、迫害を受け、屢々殺害の憂き目にあう運命にある。つまり、イエスやサタン等々の中に、魯迅が中国の伝統世界の歴史の中には見出し得なかった、異質の、新しい反逆者、「軌道破壊者」の像を見出していたという面である。

最後に、伊藤氏はこのように全文を総括した。一、竹内好が『狂人日記』を魯迅の近代文学の出発点にと見なして、その背後から「文学的自覚」を見ていた。しかし、作者は『狂人日記』を発表する前の初期の論文の時期に、魯迅の思想の骨格はすでに形成されたと考えている。魯迅がヨーロッパ近代の衝撃のもとに中国の「革命」の課題を何に見出したかという意味での彼の「思想」は、留学時代に既にその骨格を形成され（西洋文化の根底をとらえ）、『狂人日記』以後も変わっていない（連続している）。彼が見出した課題は「文化」即ち「人」の問題であり、彼の思想を名付けるとしたら、西洋文化の根底に「個」としての人間をとらえた（同時に、「個」としての民族文化を自覚した）という意味で、仮に「個の思想」とでも呼びうるものであると考えている。三、この経験は、「狂人日記」に描かれるとき「狂人の治癒（社会復帰）」と呼ぶべきもので、その背後には、竹内好が、「宗教的な罪の意識に近いもの」といったような意味での、ある「自覚」すなわち責任意識の成立が認められた。この責任意識は何らかの「全体」の一部分としてのそれではなかったという意味で、作者は、これを「個の自覚」とよび、それが、「死の威厳」の前で、すなわち「無」あるいは「絶対否定」とよばれるべきものと直面することによって、始めて可能となる一切の既成の世界観の相対化を意味している点で、これを「終末論」とよんだ。またそれが、「指導者意識」（それはしばしば同時に「被害者意識」と結び付いている）からの脱却（自分が「加害者」でもあったことによる自由の獲得）をも意味していたという意味でこれを「罪の自覚」とよんだと考えている。

(3) 『魯迅と終末論——近代リアリズムの成立』⁹ 伊藤虎丸（著作）

伊藤虎丸の著作『魯迅と終末論——近代リアリズムの成立』は、作者の個人の経験、教養、

⁹ 伊藤虎丸『魯迅と終末論——近代リアリズムの成立』、龍溪書舎、1975年。

信仰、立場、学識等々を観察問題と結びつけて、日本の戦後に民主的な「終末論」がなかった一方、魯迅には、最初から「終末論」の思想があったと反省した後、書かれたのである。本著は「終末論」を宣伝するわけではなく、「終末論」の哲学を解釈する専門書でもない。「終末論」は、ただ作者が魯迅を把握する時使った表現方式で、竹内好が魯迅を把握する時使った「文学的自覚」と同様である。作者が使用した概念は、「終末論の意味的な個の自覚」であり、神学の意味で、魯迅に「終末論」の思想があったと解釈しようとしなかったが、ただ彼には、「終末論」的な思考があったと考えている。

「終末論」という言葉は、厳格な意味でキリスト教の神学の一部であり、人に生の勇気を与えたり、各種の人生の苦難の根源を克服させたものである。イエス・キリストが再び降臨することを期待するため、神を絶え間なく望んでいて、神が世界と人類の歴史を支配していることをかたく信じさせている。「終末論」をある信仰ではなく、宗教の思想として評価する時、二重の意味が出てきたと思われる。一、現実的な批判性がある。すべての罪悪が最後に壊滅してしまうはずであるという観念をかたく信じさせている。もうひとつは、「終末」への期待と望みである。つまり「終末」は「終結」ではないから、同時に苦難の人々が最後の救いを得られると思われる。

本著の中心思想をまとめると、以下の三点になる。

まず、作者は、『文化偏至論』での「物質を排して精神を重んじ、多数を排して個人を尊重する」という言葉を例に挙げながら、人間の尊厳性を「精神」であり「個人」であることに求めるのは、単に「ニーチェ思想」というより、『旧約聖書』以来西欧キリスト教を貫いて流れる人間観の基本であろうと考えている。人間は、絶対否定としてのある超越者に直面した時、その啓示を受けた時、はじめて「多数」への埋没から呼び出されて、自由な「個人」としての人格となることができる。偶像を礼拝することが最大の罪とされるのも、それが自由を捨てて「多数」に埋没することを意味するからであろう。つまり、魯迅がヨーロッパ文明、少なくともキリスト教的人間観の、まさしく「根底」・「神髄」をとらえたものであったと言えると考えている。

第二、作者は、魯迅の早期の論文『破悪性論』の冒頭に書かれた「根本はくずれ、精神は彷徨い、中国は今やまさに子孫らの攻伐のうちに尽きんとしている」¹⁰という言葉から、魯迅が儒教的世界の「根本」=「精神」の「腐朽的死滅」——いわば「神の死」であり、その「死骸」だった。儒教世界を、「奴隷」と「奴隷の主人」で形づくられる、「人が人を食う」、食人の世界、とした認識は、魯迅において旧世界が、トータルに、対象化され、「神の死」の確認がなされたことを意味する。清末の思想界において、「神の死」——つまり、儒教的な価値体系の崩壊の後、

¹⁰ 魯迅『魯迅全集・集外集拾遺補編・破悪声論』、『魯迅全集』、学習研究社、1984年。以下原文：本根剝喪，神氣旁皇，華國將自稿子孫之攻伐。（『魯迅全集・墳』、人民文学出版社、2005年。）

例えば、康有為の孔子教にせよ、章炳麟の仏教にせよ、キリスト教を相手として意識しながら、すでに最高価値としての力を失った儒教に代わるもの、『神』の座にとって代わるもの」を求めたものということができる。彼らに続く世代に属した魯迅が、ニーチェをその根源的宗教性においてとらえ、「神」の「空位」にとって代わる新しい価値を求めないニーチェの「現代化された終末論」を受け取った時、中国はここではじめて、「ヨーロッパ」＝「近代」をその根底においてとらえ、その独自の「近代」の形成過程の出発点に立つことができたのだと考えている。

最後に、作者は、竹内好に基いて、再び『狂人日記』を更に解読した。概括してみると、以下のパターンである。外部の超越者と出会い→与えられた現実からの脱却→罪悪の意識→中間性の権威からの解放→自由的な認識の主体→与えられた現実を対象化（変革）する。その罪悪の意識は、狂人が食われる恐怖(死の恐怖)から、「自分も人を食った」という自覚に達し、死は、「四千年の食人の履歴を持つ私」という意識としてもう一度自己自身のこととなる。死は、現在の生そのものと切り離されない切迫した事実として扱われている。それは、あたかも「終末とは此世界の行路の最後に予想されるところの事件ではなく、此世界がその根底において終末的なのである」と言われるのと同然である。そして、このような「死」のとらえ方は、まさしく終末論的と言わなければならないと考えている。

三 アメリカからの著作

(1) 『兩刃之劍：基督教與二十世紀中国小説』¹¹ルイス・ロビンソン (Lewis Stewart ROBINSON) (著作)

アメリカの中国現代文学の研究者ルイス・ロビンソン (Lewis Stewart ROBINSON) 『兩刃之劍：基督教と二十世紀の中国の小説』は 1919 年から 1949 年までの中国の作家とキリスト教との関係を研究する一冊の力作である。作者は、キリスト教とユングの心理学とを結びつけて、特殊な分析方法で、キリスト教と中国の現代小説との関係を検討したと言える。

作者は、前書きで以下のように言う。陳独秀がキリスト教を論じた観点は、後生に影響力があり、中国の文人が 20 世紀前の反キリスト教の伝統から抜け出した 1 つの重要な起点となった。その後の中国の作家は、直接的にあるいは間接的に、イエスの行為の標準を参照して、キリスト教徒の反イエスの行為、更にキリスト教自身の矛盾を指摘した。この創作方法は、中国の現代文学の発展に独特な貢献をした。19 世紀の反キリスト教の作品で、作家たちは孔子の倫理道徳で、キリスト教を反駁していたが、20 世紀の作家は、ほとんど儒教の標準でキリスト教を批判していなかった。彼らはキリスト教の中で、彼らにとっての核心思想を積極的に受けて、中国に宣教しに来た教会組織に反対な意見を出していた。

¹¹ Lewis Stewart ROBINSON 『兩刃之劍：基督教與二十世紀中國小説』傳光明・梁剛訳、業強出版社、1992 年。

本著の第1章「五四時期」のキリスト教の一節——「野草」——魯迅のペシミズムは、主に魯迅とキリスト教との関係を論述した一章である。主要な内容は、以下のようになる。

第一、作者は、魯迅がキリスト教に対して風刺に富んだ評価をしたのは、当時代の産物であると考えている。1927年から、「白い恐怖」で、大量の人命を落とし、「五四時期」に、盛んに行われていた進歩精神への改革は、ひどく取り返しのつかない損害を与えられた。この年は、中国のキリスト教にとって、1つの転換点であり、だんだん保守的になり、退化してきた。魯迅の『野草』は、この背景下で、誕生したのである。

第二、作者は『野草』の『色あせた血痕の中に』で、造物主、大衆、戦士の立場を説明し、キリスト教とも関係があると指摘した。魯迅からみると、世界の二元論（善と悪の戦い）は標準的な神学と、はっきり正反対である。一方は軟弱で、無能な造物主であり、もう一方は反逆者としての勇士である。造物主は、人類を絶望に陥らせて、いつまでもそれを感じるようにさせた。勇士は、人類の唯一の希望を代表し、人類を蘇生させ、あるいは人類を壊滅させる時、造物主が恥を感じて、身を隠してしまった。

第三、作者は、魯迅の初期の一篇の文章を例に挙げながら、当時の魯迅からみると、イエスがそのような反逆者としての勇士の代表ではなく、彼が布教し始めた後に、間もなく、人々に彼の手段と『旧約聖書』で理想的な政治の解放者とはまるきり違ったことが発見された。だが、イエスは魯迅の「超人」の標準に合った時もある。それは彼が俗世間の上に立って、大衆が生まれた後、身に付いている物欲に反対しているからである。作者は更にこう言う。魯迅は、イエスを「臆病な造物主」の一人の臆病な代表にみなしている。逆に、魯迅が求めているのは、強力で自信を持つメシア——政治の方面から一人の解放者が出てきて、中国の「超人」になることであろう。

最後に、作者はもう一首の詩『復讐 二』で、魯迅がイエスの死を描写し、それがイエスの最終的に無能な体現だと思っていると考えている。

おわりに

本論文は、中国、日本、アメリカの8人の作家による7部の著作と2篇の論文を選んで、魯迅とキリスト教文化との関係という研究課題の発展と現状をみた。論文の発表時期の隔たりからみると、もっとも早いものは1967年であり、最も新しく発表された論著は2004年である。この40年間に渡る研究領域で、最も代表的な論著が研究対象にされたということである。それぞれの国別によって、以下のように、具体的なまとめを述べてみたい。

中国の考察は、以下のようにまとめてみた。一、多数の論著で、魯迅の犠牲精神に言及した。それは進化論の影響を受けている以外、キリスト教でのイエスの犠牲精神また、大衆を救おうとするものの影響を受けていることが明らかだと考えられている。二、多数の論著は、魯迅が

確かに自ら反省し、罪を贖おうとする意識を持っていることに賛成しているが、キリスト教の「原罪」と等しいものではなく、それは魯迅が中国の伝統文化を再考した後の結果だと考えている。三、多数の論著は、魯迅がキリスト教の現実的ではない「神」、「奇跡」、「天国」、「復活」などについて否定していて、キリスト教の平等と博愛と道徳的な面を肯定していると考えている。四、多数の論著は『復讐（二）』、『崩れた線の震え』、『菓』等と『聖書』でのストーリーと似ていて、魯迅が主にイエスのような啓蒙主義の改革者を表現したが、大衆に理解されていない悲しみを指摘し、感覚が麻痺している国民を呼び覚まそうとすることが述べられた。五、多数の論著で、魯迅が『聖書』を撰取する時の傾向が述べられた。つまり、『旧約聖書』での「歯には歯を、目には目を」という復讐を偏愛し、社会のいかなる階級も互いに愛し合えるというキリスト教の「博愛」を魯迅が批判したということである。

日本における考察は、以下のようである。一、考察した重点は、少数の何編かの文章に集中している。例えば『狂人日記』、『復讐（二）』などというテキストを再分析し、『聖書』の原文と比べながら、魯迅が一体どのように『聖書』を再創作したのかを探究した。二、高田氏の論文は『復讐（二）』を分析し、魯迅がイエスを徹底的に改造し、その反対側のサタンに変えた。サタンで大衆に報復させようと考えている。三、伊藤氏は、『狂人日記』の裏に中国の伝統文化と違った「罪の文化」を読み出した。これは西洋のキリスト教から来たものと判断し、また狂人からの「個人」の独立の思想の影を見つけた。四、伊藤氏はまた論著の中で「終末論」という思想を言い出して、魯迅が中国の伝統文化を批判していたことは、自らをも含めて伝統の文化を徹底的に否定した後、新しい文化の誕生という「末日への望み」を期待していると考えている。

アメリカにおける考察では、次の二点がある。一、作者は、魯迅がキリスト神学の「神」を「サタン」の位置と交換し、「神」は万能ではなくなり、臆病である一方、「サタン」は「凶悪」の化身ではなくなり、反逆者としての勇士となったと考えている。二、作者は、魯迅がイエスの形象を小さくし、イエスは決してあのような反逆者としての勇士の理想的な代表ではないと思っていると考えている。

『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで）。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000字（400字詰め原稿用紙40枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windowsは、微軟PINYIN2.0（簡体字）、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』、大阪：しずみ書房、2000年10-20頁

Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」、『或問』第1号、2000年2-15頁

Fryer, John. "Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity." *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎(2000:2-15)のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000bのように区別する。

内田慶市 (keiuchid@pp.iij4u.or.jp)

沈 国威 (shkky@kansai-u.ac.jp)